

今の時代だからこそ

審査員 大熊 崇子

第51回から、中山晋平記念音楽賞の一端を審査員として担わせていただいておりますが、まずはこのすばらしい賞の継続・発展にお力を注がれている中山晋平記念会の役員の皆様、中野市役所文化スポーツ振興課のご担当者、さらには授業時間の枠を超え子どもたちの作品作りにお手伝いされていらっしゃる教職員の方々、音楽教室の先生方に心より敬意を表したいと思います。

ここ数年コンピューターの発展により、AIがどんなことでも、作詞・作曲でさえも出来るようになりました。人間の創造力が希薄になってしまうのでは、と危惧しております。このような時代であるからこそ、作詞の題材を見つけ、メロディーを創作するということは子どもたちの感性を育てる上で、とても貴重な経験に違いありません。

毎年、どんな作品が生まれてくるのかワクワクします。この10年を振り返ると、作詞内容がバラエティーに富むようになり、ひとりひとりが身近なところから題材を見つけ作曲する作品が多くなってきていること、また歌いやすい作品が増えていることを嬉しく思います。

ある程度、形が整えられていることはもちろん大切ですが、子どもたちの、そのときにしか書けない素直な思いが込められた作品を評価したいです。

旋律は浮かんでいても楽譜にすることは子どもたちにとって難しいことです。その点をご指導される先生にご協力いただければ幸いです。

新型コロナウイルスの影響で、授賞式で優秀賞の作品を子どもたちの学校で発表出来なくなってしまったことは残念です。学校に持ち帰り、是非クラスで歌い、友達同士のきずなも深めていただきたいと思います。

この音楽賞で優秀賞を受賞したことをきっかけに音楽の道に進まれたお子さんもいらっしゃいます。音楽の道に進まなくても、応募作品を創るという行為によって、少しでも音楽に興味を持ってくれる子供が増えてくれればこの上ない喜びです。

最後に、今の時代に逆境していることかもしれませんが、子どもたちがいろいろなことを感じて自らの力で素晴らしい作品を生み出してくれることを、そして中山晋平記念音楽賞の益々のご発展を心より願っております。

光る歌に出会う喜び

審査員 寺嶋 陸也

中山晋平音楽賞の審査を10年ほどつとめさせていただきました。小学生から高校生までを対象とした作曲のコンクールというのは、全国でもそう多くはないように思いますが、60年も続いていることはほんとうに素晴らしいことで、些かでもそれに携わることができることを光榮に思っています。

この音楽賞のユニークな点は、既存の詩に作曲するのではなく、詩もオリジナルな歌を賞を募集することだと思います。いままで多い年では200曲を越え、少ない年でも50曲くらい、10年ではおそらく1000曲を優に越える応募作を見てきたわけですが、ときどきはっとさせられるような素晴らしい詩に出会うことがあります。残念ながら詩がいくら素晴らしくても、歌として良い曲になっていないと賞にに入れることはできないのですが、いくつもの応募作を通して、小学生、中学生、高校生のそれぞれの年代における心の声を聞く思いがします。

また、この音楽賞は学校ごとの応募の形をとっているのですが、作曲ということを経験する中でどういうふうにとらえているのか、先生がたが悩んでいらっしゃるようすも、応募作を通して垣間見る思いがします。かつて「歌」は現代よりももっと生活に深く関わっていて、子守歌を歌う母親とか遊び歌を歌う子ども、畑仕事や祭りなどにも歌は付きもので、言葉に節を付けて口ずさめばそれが歌になる、ということをもっと多くの方が普通に行っていたのだと思いますが、近代ではそういったことが衰退し、学校では主に楽譜を介して音楽を教えるようになってしまいました。楽譜を書く、ということは字を書いたり絵を描いたりすることよりは日常的ではなく、多くの人にとって生活に必要なことでもありません。近年は録音技術や電子楽器の発達によって、とくに商業音楽の世界では楽譜を介さずに曲を作って広めることもできるようになっていますが、子どもの歌にふさわしいことではないように思います。近代の生活のなかで「歌」はあまり必要なものではなくなってしまう、と思う反面、楽譜を読むことや書くことが、それほど特別なことでなくなれば、表現の手段としての歌の創作が、もっと身近になるのではないか、という期待も持っています。

この音楽賞では楽譜を通しての審査、ということにどうしてもなってしまいますが、ごくたまに、学校で教わる種類の歌とはだいぶ雰囲気の違い、わらべうたにそのルーツをたどれそうな歌もありました。また、とくに小学校低学年の子が作る歌には、習ってできた、というものではない自然さを感じられるものもしばしばあります。たどたどしい筆跡の楽譜の中に光るそういった歌と出会えることは、この音楽賞に携わってのいちばんの喜びです。